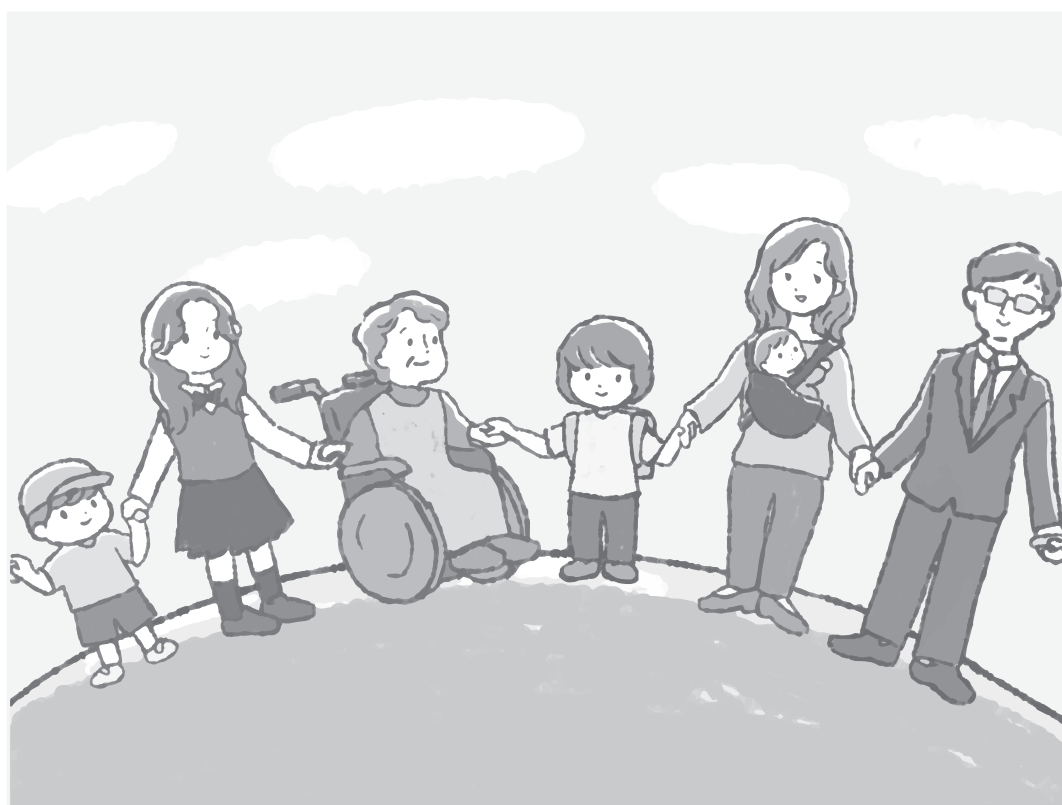


令和6年度
児童・生徒福祉作文作品集

青空



社会福祉
法人 佐野市社会福祉協議会

福祉作文作品集「青空」の発刊によせて

福祉作文作品集「青空」の発刊にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

令和六年度児童・生徒福祉作文募集事業に、1, 109編ものご応募をいただきまして、誠にありがとうございます。特に優秀な作品につきましては、最優秀賞、優秀賞、佳作を選出させていただきました。各賞を受賞された方につきましては、大変おめでとうございます。

今回の福祉作文では、家族や身近な人との関わりや自身の経験、体験を通して、気づいた事や感じたことが素直な気持ちで表現された作品が多くみられました。どの作品も自分の思いがしつかりと綴られており、大切な人との笑顔を思い浮かべながら書かれた、心温まるすばらしい作品でした。

この作品集が大勢の市民の目にとまり、身近な福祉に関心を持つきっかけとなり、優しさとおもいやりの心で互いに助け合うことのできる「福祉のまちづくり」が広がっていくことを切に願います。

むすびに、本事業の実施にあたりまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆様、作品を応募していただいた小・中学生の皆さんに心から感謝を申し上げます。

社会福祉法人 佐野市社会福祉協議会

会長 五十畑 正夫

題 名

最 優 秀 賞

はじめて知つたいみ
私にできること
介護の仕事について
一人のために

優 秀 賞 (小学生の部)

おかあさんとあかちゃん
こえをかけよう
かみの毛のプレゼント
「またおいで。」「また来るよ。」
同じやさしさ
相手を思いやるきれいな心
「福祉について」
多様性を学んだキャンプ

学 校 名 学 年 氏 名 (敬称略)

田 沼 小 二 年 柴 田 莉 緒
城 北 小 三 年 飯 田 愛 真
佐 野 小 六 年 杉 村 ゆ う な
北 野 中 三 年 藤 山 心 結

葛 生 義 一 年 石 澤 桃 歌
植 野 小 二 年 高 橋 一 華
赤 見 小 二 年 石 黒 藍 菜
天 明 小 四 年 砂 賀 晴 月
城 北 小 四 年 重 松 さ 那
石 塚 小 四 年 植 木 紅
あそ野義 五 年 石 井 花 芽
城 北 小 六 年 浅 野 絢 大

「勇気を出す」ことの大切さ

田沼小六年 木本路恩

17

優秀賞 (中学生の部)

「おばあさんに伝えたいこと」

車いすとエレベーター

福祉について考えたこと

夏祭りを通して

祖父と福祉

南中一年 おおしまも
田沼東中一年 うちだ田彩葵
葛生義七年 おんだ田あおい
赤見中三年 よしだ田美緒
葛生義九年 や島つむぎ

18 20 21 22 23

佳作

(題名・学校名・学年・氏名)

25

最優秀賞

(小学校一・二年生の部)

はじめて知ったいみ

田沼小学校 二年 柴田^{しばた} 莉緒^{りお}

わたしは、ふくしということばを知りませんでした。さく文を書くことになり、なんとなく考えてみると「しんせつにすること」なのかな、と思いました。じよでしらべてみると「しあわせ」とか「こうふく」と書いてありました。じぶんがよそうしていたいみとすこしちがうようにかんじました。おかあさんに聞いてみると、

「じぶんだけのしあわせではなくて、みんながしあわせになるように、ということかな。目が見えない、耳が聞こえない、あるくことができないう人であつても、いやな思いをしない、こまらないうに、みんなですけあうのだよ。」

と、言っていました。おかあさんのしごとふくしにかんけいあると聞き、夏休みにデイサービスに行きました。

デイサービスには、おじいちゃんやおばあちゃんがいきました。そこでおかあさんは、かんごしをしています。おかあさんは、やさしく声をかけながら、けつあつをはかつたり、おふろのお手つだいをしたり、たいそうをたんとうしたりしていました。わたしがいんしよにのこつたのは、おかあさんの体そうです。まどのそとに見える山をゆびさして、

「山にのぼつてみましょう。一、二、三。」

と、言いながら、おじいちゃんやおばあちゃんといっしよに足ぶみをしていました。わたしはおもしろくて、わらつてしまいました。

「いっしよにやろう。」

と、みんなに言われたけれど、はずかしくてできませんでした。

デイサービスに来て、すこしこわいな、と思つたときがありました。それは、おじいちゃんがおこつていたときです。

「家にかえるんだよ。」

「なんでこんなところになくちゃいけないんだよ。」

と、おこつていました。わたしは、たのしくたいそうしたり、みんなでごはんを食べたりおふろに入ったり、

こんななたのしくていいところなのに、なんでおこっているのだろうと、思いました。おかあさんに聞いたら、

「デイサービスにくるわけが分からなくなってしまったこともあるんだよ。家でおふろに入るところでこっせつしてしまったり、だからといって、おふろに入らなかつたらびよう気になったり、においがしてきてしまって、いやな思いをしたりするから、それをなくすためにも、デイサービスにきてもらっているんだよ。」

わたしは、すこしふくしのしごとが分かった気がしました。そして、わたしのおかあさんはすごいな、かっこいいなと思いました。ふつうはできないたいけんで、たのしかったし、また行きたい気もちでいっぱいです。ふくしとは、みんなえがおになれることでした。



最優秀賞

(小学校三・四年生の部)

私にできること

城北小学校 三年 飯田 愛真

近所に住む九十さいのおばあさんは、毎朝ウォーキングをしている元気な方でした。私を見かけると、かならず声をかけてくれ、手遊び歌でいっしょに遊ぶこともありました。お母さんに用事をたのまれておばあさんの家に行くこともありました。七五三の写真を見せに行くとなみだをながしてよろこんでくれました。私はおばあさんのことが大スキです。

でも、何年か前からおばあさんの様子がちがうことに気づいたので。私が家に行っても、だれだか分からない感じでふしぎそうな顔をしたり、何度も何度も同じことを聞かれたりするようにになりました。私は気になってそのことをお母さんにつたえました。するとお母さんは、

「おばあさんはね、にん知しようになっちゃったんだよ。」

と教えてくれました。私はにん知しようのことをよく知らなかったので、お母さんにくわしく聞いてみることにしました。お母さんはろう人ホームではたらいにいるので、にん知しようの方と関わる人が多いです。だから、私にも分かりやすく話してくれました。にん知しようは、のうのびよう気によっておこるもので、年をとるほどなりやすいそうです。人の顔や名前が分からなくなったり、同じことを何度も言ったり、おこりっぽくなったりといういろなしようが出てきます。でも、まわりの人が助けてあげることです。安心してくらすることが分かりました。

この話を聞いて、私はおばあさんと同じだと思いました。おばあさんに何度も同じことを聞かれたとき、『さつき話したことをまた言っている。何度も答えるのめんどろだな。』という気持ちになつていたことを思い出しました。お母さんが、私に言いました。

「おばあさんの心に、おじやまするんだよ。安心できるように、やさしくせつしてあげるの。」

私は、次におばあさんに会ったときから、お母さんに教えてもらったようにやってみました。同じことを聞かれても、一回一回いいねいに答えました。心ぱいそうにしていたら、やさしく声をかけました。私がそ

うすると、おばあさんはえ顔になり、私もうれしくなりました。

にん知しようの方とのせつし方は、かんたんではありません。でも、私にもできることがあります。心によりそつて、安心させてあげること、え顔にしてあげることです。おばあさんのえ顔が、それを教えてくれました。

これからも、自分にできることを見つけて、少しでもにん知しようの方の助けになればと思います。そして、え顔がいつぱいになれば、やさしい世界になる気がします。まずは、みぢかにいる人に目を向けていきたいと思ひます。



最優秀賞

(小学校五・六年生の部)

介護の仕事について

佐野小学校 六年 杉村^{すぎむら} ゆうな

私の母はケアマネジャーという仕事をしています。正式には、「介護支えん専門員」といい、担当する人が望む生活ができるような色々なお手伝いをします。近くに住む祖父もデイサービスに行ったり、看護師の方が訪問に来てくれたりするので、私にとって介護の仕事はとても身近な職業です。

今年、習っているチアリーダーディングチームで、介護し設へい問に行きました。感染症対策でなかなか実現できず、五年ぶりの実しでした。

車いすの方、手を引いてもらって歩く方、寝たきりの方もいました。私たちが演技をすると、みなさんの顔がぱあっと明るくなり、手拍子をしてくれました。演技の後は、一人一人と手をにぎり、お話をしました。涙を流して喜んでくださる方もいました。

自分がチアリーダーディングの演技をするときは、見て

くださる人たちに元気や勇気を届けられるようにと心がけていますが、たくさんの方の応援に私たちが元気をもらいました。

い問の後、私は母の仕事の様子を見学することができました。チアのことだけでなく、家族の話や身体のこと、昨日見たテレビの内容など、母はその場にいる一人一人にちがう言葉かけをしていました。

帰宅してから、なぜいろいろな話をしていたのか聞いてみました。すると母は、

「介護には直接関係のない話でも、話の中からその人の考えや思っていることを知って、その人がどんな暮らしがしたいのか、探っているんだよ。」

と、教えてくれました。

介護の仕事は、車いすを押ししたり、食事やトイレのお手伝いをしたり、身体を動かす力仕事だと思っていました。介護の仕事をする人は減っていて、ロボットによる介護を行う国もあることをテレビで観たことがあります。

けれど、母のように、介護が必要になり生活に不便を感じている人の思いを考え、その願いをかなえようとする仕事もあります。これは、ロボットではできないし、人間でも言葉や文化がちがうとなかなかうまく

できないものだと思います。母の仕事は、なかなか替わることでできない、大変だけど素晴らしい仕事なんだなと思いました。

これから高れい者がさらに増え、介護を必要とする人も増えていくそうです。現在、七十五才以上の約二十三パーセントの方が介護を必要としているようですが、これから高れいの方がどんどん増えていくことで、介護を必要とする方もさらに増えていくと予測されています。もつと多くの人に介護を身近に感じてもらえるように、学校や社会、個人で介護について学び、社会全体でみんなが助け合って生活できる仕組みができればいいなと思います。



最優秀賞

(中学生の部)

一人のために

佐野市立北中学校 三年

藤山 ふじやま
心結 みゆ

皆さんは、在宅介護を受ける高齢者にはどのくらい
の人の助けが必要だと思いますか。私は、家族の介護
と時々ヘルパーさんが来てくれるだけだと思っていま
した。けれども実際には、もつと多くの人に関わって
いることを知りました。

私の祖母が在宅介護を受けていた時のことです。最
初、祖母の在宅介護を受けるにあたっての打合せが家
で行われました。その時は何も分からなかった私です
が、大勢の人が集まっていたので大変驚きました。本
人、ヘルパー、看護師、医師、ケアマネジャー、福祉
用具貸与事業者の方など十一名の人が祖母のために話
し合いをしていました。そして実際に在宅介護が始ま
りました。毎日の生活では午前中に一回、午後二回
ヘルパーさんと看護師さんが入れ替わりで祖母の様子
を見に来てくれました。一週間に一度は必ず医師の方

も様子を見に来てくれました。すぐそばで診察の様子を見るのができたのでとても安心できました。私自身も実際に色々な手伝いをする事ができました。薬剤師さんが用意してくれたたくさんの薬の確認をしたり、祖母の体にクリームを塗ったりしました。祖母に對してできる介護の手伝いが限られている中、私に仕事を託してくれたことが嬉しかったです。ヘルパーさんからは、仕事についての話を聞くこともできました。この機材はどんな時に使うのかとか、身体の状態から考えられる危険性や、医療のことも教えてもらいました。

祖母の在宅介護を受ける中で特に印象に残ったことは、関わってくれた医療従事者の方の気遣いです。祖母に對する言葉選びに感動しました。本人や家族が不安にならないようにずっと笑顔で心の支えになるような声掛けをしてくれました。「何か不安なことがあったらいつでも連絡してください。」一見すると、誰にでも言えてあまり心に残らないような言葉です。でもヘルパーさんの言葉は、聞いているだけで言葉の重みが違うと気づきました。私は心が軽くなりました。家族みんなも同じでした。

一カ月にも満たない期間で、祖母の在宅介護に関わ

った方々とは強い信頼関係で結ばれ心に残る経験ができました。ヘルパー、看護師、医師、ケアマネジャー、福祉用具貸与事業者、薬剤師、家族の支え、その他にも私の知らない所で色々な人が携わっていたという話を聞き、一人のためにこんなにもたくさんの人が援助していることを初めて知ることができました。

私は祖母の在宅介護の体験を通して、一人一人が誠意をもって仕事をしていることが分かりました。とても大変な仕事なのに毎日笑顔で働く姿を見て本当のプログラムの姿を見たような気がします。この経験を自分の将来に役立てたいと思います。



優 秀 賞 (小学生の部)

おかあさんとあかちゃん

葛生義務教育学校 一年 石澤いそがわ 桃歌ももか

七がつ、わたしのいえに、おとこのこのあかちゃんがうまれました。おねえちゃんとわたしとおとうとの三きようだいになりました。

ときどき、おとうとをひぎのうえにのせることがあります。おとうとは、ほっぺがマシユマロのようにぶにぶにしている、とつてもかわいいです。おとうとがのんだミルクのほにゆうびんをあらうおてつだいもします。おとうとがうまれてきてくれて、とつてもうれしいです。

おとうとがおなかにいるとき、おかあさんは、とつてもたいへんそうでした。だからわたしは、にもつをもつてあげたり、あしをもんであげたりしました。おかあさんは、

「ありがとう。うれしいよ。」

このまえ、おかあさんのおなかがおおきかったとき

のまねをしてみました。あかちゃんとおなじおもさになるように、ランドセルにきようかしよやペットボトルをいれて、まえにかかえてあるいてみました。おもたくて、おもたくて、おどろきました。とくに、にもつをもちあげたり、おかあさんがよくやっているぞうきんがけをしたりするのがたいへんでした。あせがだらだらでて、いきがはあはあして、おなかのおもさで、なんどもたおれそうになりました。

おかあさんは、たいへんなのに、いつもえがおです。えがおでおしごとをして、えがおでごはんをつくったり、せんたくをしたりしています。そんなおかあさんは、つよくてかっこいいな、とおもいます。

くるまで、びょういんやスーパ―にいったとき、にんぷさんやあかちゃんが、とおくからあるかなくてもいいように、いりぐちのちかくに、「おもいやりちゆうしゃスペース」がありました。おかあさんは、

「とつてもたすかるね。」

でんしゃには、にんぷさんやおとしより、からだのふじゆうなひとたちがころばないように、いすにすわることが出来る「ゆうせんせき」があるんだよ、とおとうさんがおしえてくれました。わたしたちのまわり

には、たくさんのおひとたちをまもるくふうが、いろいろあるんだな、とかんじました。

いま、かぞくみんなでちからをあわせて、おとうとにミルクをのませたり、おむつをかえたり、おふろにいれたり、ないたらだっこをしたりしています。まいにちたいへんですが、おとうとのマシユマ口ほつぺをさわると、うれしくて、しあわせなきもちがあふれます。

これからも、わたしたちのまわりに、にこにこえがおのおかあさんや、げんきいっぱいのおかちゃんが、たくさんふえるといいなとおもいます。わたしも、にんぷさんやあかちゃんをみかけたら、しんせつにしたいです。

こえをかけよう

植野小学校 二年

高橋 たかはし 一華 いちか

わたしのおかあさんは、かんごしです。まい日、わたしたち三人の子どもをそだてながら、いそがしそうにしごとへ行っています。夏休みに入ったときに、おばあちゃんがおかあさんの子どものときの話をしてく

れました。

小学生のおかあさんは、じゅぎようでろう人しせつに見学に行つて、おばあちゃんたちと話をしたり、いっしょにあそんだりしていました。その見学が終わつた後に、「また来るねとおばあちゃんたちとやくそくをしたから。」と言つて、友だちといっしょに、とおいしせつへ歩いて会いに行つたそうです。そして、中学生になつたときは、デパートではな血が出てしまつた小さい子を見つけたときには、その子のところへ走つてティッシュをわたしたそうです。それから、道ろでころんだ人を見つけたときには、車のじよしゆせきからおおりて、「だいじようぶですか。」と声をかけていたそうです。

おかあさんのいろいろな話を聞いた後におばあちゃんに、

「もし、自分の近くでこまっている人を見つけたらどうする。」

と聞かれました。わたしは、まわりの人が見ている中で人をたすけることは、ちよつとはずかしいとかんじたので、どうするかまよっていました。しかし、おかあさんのようにまわりの人の目を気にしないで、こまっている人に声をかけることは、自分にとつてもこま

っている人にとつてもいいことだと思いました。そのように考えたので、わたしは、おばあちゃんに

「できるよ。」

と答えることができました。おばあちゃんはそんなわたしを見て

「そういうと思ったよ。」

とニツコリわらいました。

これからは、みんながはずかしいと思っっていることにたいしても、わたしは、こまっている人を見つけたら声をかけたり、たすけてあげたりできるようになりたいです。また、たくさんの人が、はずかしがらずにたすけてあげられるよの中になればいいなと思いました。

そして、小学生のときから大人になった今でも「かんごし」というしごとを通して、こまっている人をたすけているおかあさんをわたしは、じまんのおかあさんだとかんじています。おばあちゃんの話聞いて、子どものおかあさんがだれかをたすけた話をもっと聞きたいです。また、おかあさんのしごとである「かんごし」のしごとについて、くわしく知りたいと思いました。わたしは、これからは、自分の近くでこまっている人にたいして、声をかけたり、たすけたり

して、大きくなったらだれかのためにするしごとをしたいです。

かみの毛のプレゼント

赤見小学校 二年

石黒いしくろ 藍菜あいな

わたしは、一年生の十一月にヘアドネーションをしました。ヘアドネーションは、びょう気でかみの毛がなくなってしまう人にウィッグをつくってあげるためのかみの毛をプレゼントすることです。

わたしがヘアドネーションのことを知ったのは、幼稚園の年長さんのときです。おかあさんに、

「びょう気でかみの毛がなくなってしまう人に、あいなのおきれいなかみの毛をプレゼントできるよ。」

と、教えてもらいました。じぶんのかみの毛をプレゼントすることで、かみの毛でこまっている人がよくなるくれるならと思います、ヘアドネーションを試みることにしました。のばしているときゆう、かみの毛をきれいにあらったり、かわかしたりなど、お手入れがたいへんでしたが、きれいなかみの毛をプレゼントで

きるように、がんばってきました。

いよいよヘアドネーションをする日がきました。びようしつに行ったとき、すぐきんちようしました。三さいの七五三がおわってから、ずっとかみの毛をのばしてきました。だから、この日は、わたしにとつてびようしつでかみの毛を切ってもらうのは、はじめてでした。でも、びようしのおねえさんがとてもやさしくて、だんだん、

「たのしみだな。かみの毛のプレゼントができるぞ。どんなふうになるのだろう。」

という、わくわくした気もちになりました。まず、かみの毛を六つに分けてゴムでむすび、ハサミで切りました。びようしのおねえさんがわたしとおかあさん、おにいちゃんにかみの毛を切らせてくれました。切りおわったかみの毛を見て、こまっている人のためにつかってもらえると思うと、なんだかわたしのところがあたたかくなりました。

ヘアドネーションには、すごく長いかみの毛がいるので、かみの毛がともみじかくなりました。家ぞくや友だち、先生におどろかれました。わたしはみじかいかみがとても気に入って、大すきになりました。でも、わたしは今、また、かみの毛をのばしています。

また、ヘアドネーションをして、びよう気でこまっている人をたすけたいからです。テレビで今、日本にはヘアドネーションのかみの毛をまっている人がたくさんいるとやっています。わたしのしたこと、だれかがえがおになってくれたら、とてもうれしいです。これからも、人のためにできることをやっていきたいです。

「またおいで。」「また来るよ。」

天明小学校 四年 砂賀すなが 晴月はづき

病室、テレビ電話にうつるばばちゃんは、呼吸が苦しそうだった。さんそマスクをしながら、私や弟のよびかけに力をふりしぼって、手をふってくれた。

ばばちゃんは九十四才。私のひいおばあちゃん。心ぞうが弱り、肺にも水がたまって入院した。病室に入れない私は、ばばちゃんに会いたくて、もつと話がしたくて、涙が出た。

数週間後、きせきの退院でき、病院にむかえに行つた。ばばちゃんは足腰が弱り、車いすに乗って出てきた。そして、人や場所が少し分からなくなっていた。

ばばちゃんに会えて、とてもうれしかったけれど、元
気だったところとちがう様子に、私も家族も少しとま
どった。車の乗りおりも大変そう、家でも、着がえ、
トイレやお風呂など手伝いが必要なことがふえ、介
生活が始まった。

ばばちゃんは、自分が入院していたことを覚えてい
ない。同じ話を何度もくり返し話す。さつきご飯を食
べたことを忘れることもある。自分は歩けると思っ
て、車いすから立ち上がり転んでしまう時や、一人でお風
呂に入ると、したくを始めようとする時もある。

ばばちゃんといっしょにくらす私のばあちゃんは、
目がはなせないと言って、出かけることもむずかしく
なった。おたがい思いが通じず、おこつて、言い合い
になることもある。

私はそれを見て「大変そうだな、何か自分にできる
ことはないかな。」と考えた。そして弟や家族と話し
合い、工作をした物で、ばばちゃんと遊ぶことを思い
ついた。図書館で本をかりて、ゴムめいろやビー玉コ
ロコロゲーム、紙コップゲーム、サイコロパズルを作
って、ばばちゃんといっしょに遊んだ。サイコロパズ
ルは絵を合わせるのが少しむずかしく、私や弟がピン
トを出しながら遊んだ。ばばちゃんはこのこに楽しそ

うだった。それを見て私も作って良かったなと思っ
た。

今はデイサービスやショートステイという福祉サー
ビスを利用している。お風呂に入れてもらったり、ぬ
りえや工作、ドライブやゲームをやったりするとばば
ちゃんが教えてくれた。しせつのしよく員さんやケア
マネジャーさんが連絡をくれたり、家に来て家族の話
をきいて、より良いサポートを考えてくれたりする日
もある。ばあちゃんも自分の時間が少しもてるよう
になった。

ばばちゃん家に遊びに行くと、私の名前をまちがえ
ることもあるけれど、とてもよろこんでくれる。それ
が私はうれしい。

「はあちゃん(晴月)またおいで。まってるよ。」

「また来るよ。」

これは、帰る時にばばちゃんと必ずするやりとり。私
にはせんもん的なサポートは、まだむずかしいけれど、
「みんなが笑顔でいられるために、自分には何ができ
るか」私なりに考える福祉を大切にしたいと思う。

そして、これからも私は、ばばちゃんに会いに行く。

同じやさしけれ

城北小学校

四年

重松^{しげまつ}

佐那^{さな}

「きれいな花火だね。」

車いすのおじいさんの言葉を聞いて、今日来てよかったですとわたしは感じました。

夏休みに、父が働いているグループホームで花火大会がありました。

「今度しせつで花火大会があるからお手伝いをしてみない。」

と父から言われたときは、しせつがどのような場所かどうか分らないのできんちようしました。でも思い切つてやつてみることにしました。

「グループホームという所は、にん知しようで記おく力が低下していてお世話が必要なお年よりが、家の代わりに生活をしている場所だよ。」

と父から教わりました。でも、わたしはグループホームにいるお年よりたちがどういう様子なのか想ぞうできませんでした。

花火大会では、手持ち花火を人数分に分けて、お年よりに配る仕事をしました。いろいろな種類の花火を

楽しんでもらえるようによく考えて分けました。花火の時間になると、お年よりがしせつから外へ出てきました。つえをついている人や、小さな車いすみたいなものをおしながら歩いている人がいました。車いすに乗っていたり、しょく員の方に手を借りたりしている人もいました。どの人も、いすから立ち上がることも大変そうでした。でも、しょく員の方は、お年より一人一人の様子に合わせて声をかけていました。かいごの度合いは人によつてちがうけれど、それぞれに合った方法でかいごすることで、みんなと同じように生活できるのだと思いました。

おばあさんに花火を手わたしたら、

「こんない物をもらつていいの。」

と言つてくれました。お年よりの方が、花火を楽しんでくれるかが心配だったので、喜んでもらえて安心しました。

車いすに乗つて花火をしているおじいさんが、

「お姉ちゃんもやりなよ。」

と花火を分けてくれました。わたしは、にん知しようになると、いろいろなことが分からなくなつてしまうと思つていたのです、このようにやさしく接してもらるなんて思つていませんでした。自分のことよりも、

わたしのことをきづかってくれたことにおどろきと感動の気持ちがわいてきました。

花火大会の最後に、みなさんにおり紙で作ったうで輪をプレゼントすると、とても喜んでもらえました。特に、車いすに乗っているおじいさんは、両手をあげて大喜びしてくれました。プレゼントをもらって喜ぶ気持ちには、わたしと同じだと思いました。

これからも、お年よりの方と交流を続けていきたいです。おたがいにやさしい気持ちで接することができたら、とてもすてきだと思います。

相手を思いやるきれいな心

石塚小学校 四年 植木 妙紅

「福祉」とは何なのでしょう。私の中の「福祉」は、一人一人が毎日を幸せにすごすことです。辞書で調べてみると、「人々が満足できる生活のこと」と書いてありました。しかし、人々が満足できる生活とはどんなものでしょう。私たちが生きています。今はその満足できる生活をしているのでしょうか。これから、自身の体験をのべたいと思います。

私が小学三年生の時のことです。気付くとまぶたが何となく重くて、それを母に伝えると、これまで何度かものもらいになってきていることもあったので、そのかいうせいが高いからと、すぐ眼科へ連れていってくれました。いつ行ってもこんでいる病院なので、急いでしたくをして向かったのですが、とう着した時にはすでにたくさんの人がしん察を待っていました。空いている席はないか見わたすと、丁度二人がすわれそうなスペースが運良くありました。せつ置してあるテレビのニュースを見ながら自分の名前がよばれるのを待っているのと、こまった顔をしたおじいちゃんがいることに気付きました。改めて周りを見わたしてみると、席が空いている場所もあるにはあるのですが一席分のスペースで、おじいちゃんには付きそいの家族がいました。私は、

「席をゆずった方がいいかな。でも、ゆずろうとしている人が他にもいるかもしれない。」

と、自分の中であれこれ考えました。しかし、けい帯電話をいじっている人や、目をつぶって休んでいる人、つえを持っていて足やこしのつらそうな人など、それぞれが自分にしか意識しきに向いていないと感じてしまいました。私は、自分の名前がよばれるまですわって

いたいと思っただけで、おじいちゃんの気持ちを考え、席をゆずろうと決心しました。母に小声で私の気持ちを話すと、

「お母さんも同じ気持ちだった。行こう。」

と言つて、母はすつと立ち上がり、おじいちゃんのいる方へ歩いていきました。私はそれについていくと、母が、

「私たちもうすぐよばれると思うので、良かったらどうぞ。」

と、おじいちゃんに声をかけました。すると、

「ありがとう。これから入院して手じゅつでね。いつよばれるか分からないし、こまっていたよ。そちらはつらくないのかい。」

私は、おじいちゃんの心のやさしさを見た気がします。私がつらくないことを伝えると、ふたたびお礼を言われ、笑顔で席についていました。私はこの時、勇気を出して行動したことで私自身もうれしくなりました。席をゆずるといふ動作は、相手を思いやるきれいな心があるかどうかだけなのだと感じました。

「福祉」とは、人々が満足できる生活のことです。少しずつ近付いているとは思いますが、まだ百パーセントではありません。まずは自分から、相手を思いや

るきれいな心で生活しようと思います。それが満足できる生活の第一歩、人々が相手を思いやって手を取り合える社会を私は望みます。

「福祉について」

あそ野学園義務教育学校 五年 石井 花芽

私は、学校で福祉委員会に所属しています。福祉委員では、朝のあいさつ当番や募金活動などをやっています。今回福祉に関する作文を書くにあたり、「福祉」とはどういうことなのかについて、もう一度考えてみることにしました。

辞書を引いてみると、「人人が満足できるような生活環境のこと。特に、恵まれない人人の満足できるような生活環境。」と書いてありました。これをふまえて、私の学校の福祉委員会でも、学校に通うみんなが気持ちよく生活ができる環境を作ること目標に活動していかなくてはならないと思いました。これまで何となくやっていたあいさつ運動や募金活動もその内容をきちんと理解して取り組みたいと感じました。そして、あいさつはみんなが元気になるように、また、募

金はだれのために行うのかを考えて、心をこめてやりたいと強く思いました。そして、私は福祉委員として、クラスでも助け合って、楽しいクラスにしていきたいです。

また、私は学校以外の場所でも福祉について考える場面もありました。ある日、家族で買い物に出かけた時のことです。食事をしていると、近くに車イスに乗っている女性がいました。私はあまり見たこともない様子に、びっくりしてしまいました。弟や妹が指をさしたり、じろじろと見たりしていました。本当はいけないことだと分かっていたのですが、どうしても気になつてしまい、私も見てしまいました。でも、その人は困った様子でもなく、他のみんなと同じようにしていました。もしその時にその女性が困っていたら、はたして私は助けることができたのだろうか、と考えました。きつと、今の私には助けることができなかったと思います。

だからこそ、このことをきっかけにもつと福祉のことを知りたい、勉強したいという気持ちが生れました。今まで私がやってきたこと全てに意味があると思いい、これからの私の行動一つ一つをよく考え直して生活をしていきたいです。また、私もいつ人の助けが必

要になるか分かりません。勉強したことや考えたこと、身に付いたことを私だけのものにせず、身近な人にも伝えていきたいです。まずは、私の家族、特に弟や妹に福祉の大切さが伝えられるような五年生を目指していきたいと思います。

そして、いつかあの時に出会った女性のような人とまた出会った時、自然と手を差し伸べてその人たちの力になれるように、これからも福祉について勉強していきたいです。私のような人が増えていくことで、一人で困る人が少しでも減るような明るい社会へとつなげていきたいです。そのために、私ができることを考え、勇気をもって実行できるよう、努力したいです。

多様性を学んだキャンプ

城北小学校 六年 浅野 あきの 絢大 げんた

みなさんは、目の不自由な人が自分で野菜を切ったり料理をしたりすると聞いたらどう思いますか。

ぼくは、目の不自由な人や車いすの人と一緒に、日帰りキャンプをしました。この体験を通して、多様性やたくさんのことを知り、みんなで楽しく過ごすこと

がどれだけ大切かを学びました。

キャンプの日、朝六時に駅に行きました。事前に車いすの利用を申し込んであったので、乗車のときに手伝ってもらうことができました。ホームと電車のすき間や段差に渡し板を設置してもらうことで、車いすのままスムーズに移動でき、目の不自由な人の転落防止に役立つことが分かりました。下車駅にも連絡がいつて駅員さんが待機してくれたので、降りるときも安心して移動することができ、とてもありがたかったです。

会場に着くと、八人ずつ七つのグループに分かれてバーベキューの準備をしました。野菜を切るのは、目の不自由な人です。切るときは、食材の形や大きさを手でさわって確かめてから包丁を使っていました。手慣れた様子で野菜を切っていることにおどろき、目が見えなくても工夫することで安全に使うことができることに感動しました。

「目が不自由だから包丁は危ない」と思っていたけれど、できることを話し合って役割分担することが、相手を思いやることにつながるのだと初めて気付くことができました。また、「できないのであれば、できる方法を考える」という言葉に重みを感じ、人それぞれの多様性を尊重することの必要性を知りました。

車いすの人は、炭に火を付けてスペアリブと野菜を焼きました。焼き加減を見たり、目の不自由な人がやけどをしないように熱いものは先に伝えたり、皿は位置が分かるようにクロックポジションに置いたりしました。おたがいに声をかけ合って協力することで、みんながバーベキューを楽しむことができました。

次の日の朝、目の不自由な人からアクセシビリティーサービスを使って、お礼のメールが届きました。移動するときやトイレに行くときに、ぼくのかたに手を置いてもらってゆう導した人でした。手伝うたびに、

「ありがとう。」

と言ってもらえてうれしかったことを思い出しました。キャンプをした人たちと過ごした時間は、ぼくの大切な宝物です。これからも、優しさと思いやりを忘れずに、ぼくにできる福祉活動をしていきたいです。人それぞれがもつ多様な能力や考え方を尊重して、支え合ったり助け合ったりすることができれば、よりよい社会になっていくのではないかと思います。

「勇気を出す」ことの大切さ

田沼小学校 六年 木本^{きもと} 路恩^{じおん}

今年の一月一日夕方、僕は家族のみんなでいつもの平和なお正月を迎えていました。そんな時、テレビで地震速報が流れてきました。石川県能登地方を中心に大地震が起きたというのです。地震によつて、家や建物が倒壊したり、津波で家や車等が流されたり、有名な地域一帯で火災が発生し、たくさんの家やお店が焼失する現地の様子をテレビやインターネットのニュースでたくさん見ました。

その地震でたくさんの方が亡くなって、行方不明者を必死に探す家族の様子もテレビでたくさん見て、僕はとても悲しい気持ちになりました。真冬の中、住んでいた家が被災した人たちの生活はどうなるのか……。もし、それが僕の家だったらと考えたら、とても怖いなあと思いました。それと同時に、この地震の被災者の方々に僕が力になれることはないのかなあという思いも出てきました。冬休み中だったので、僕は現地へ行き、少しでも人々の助けになればと思い、災害ボ

ランティア活動をしたいと両親に相談してみました。両親は「路恩らしくて、とても良い考えだけど、路恩は未成年者だし、一人で災害ボランティア活動に参加するのは無理だよ。保護者と一緒だったら活動できると思うけど、来週から学校や習い事が始まるから、今は現地に行くのは厳しいんじゃないかなあ。現地に行かなくても路恩ができるボランティア活動を考えてみたら？」と言われました。僕ができることは何かなあ。生活用品を送ったり、募金活動をしたりするのはどうかなあと数日間考えていましたが、僕一人では、できっこないか？と考えてしまい、勇気が出なくて、自分の考えをいえないまま冬休みが終わってしまいました。冬休み明けの教室で、クラスの一人の子がみんなに「みんなで能登半島の復興のために募金をしよう。」と言いました。そうしたら、やろう、やってみよう、という沢山の声聞こえて、話がどんどん進み、学年から学校全体の募金活動することになり、全校児童に募金活動の協力をお願いしました。三日間で約八万円が募金が集まり、後日、校長先生が日本赤十字社に募金を送り、募金活動は大成功をおさめることができました。この募金活動が無事大成功で終わったのも、クラスの一人の子が勇気を出して、「募金活動をしよ

う。」と言ってくれたからです。僕は、勇気が出なく積極的に意見を言うことができなかつた点を反省しました。一人でやるのではなく、みんなで意見を出して協力し合いながら活動することの大切さも学びました。今後は、この経験を通し、もし災害等が起きてしまったら、今自分ができることを考え、勇気を出して意見を言い、みんなで協力しながら、困っている方々の手助けをしたり、少しでも幸せを届けられる活動ができるようにしたりしていきたいと思います。



優 秀 賞

(中学生の部)

「おばあさんに伝えたいこと」

南中学校 一年 大島 おおしま もな

「おばあさん、おはようございます。」
この一言は、近所のおばあさんに伝えたくてできずにいた言葉です。

私は高齢者の福祉に関心があります。私は、福祉は、尊い人として生まれてきた私たちを守るための権利というふうに考えています。

高齢者は私たちの憧れるべき人生の先輩であり、高齢者が快適で尊厳のある生活を送るには、家族や地域の温かいサポートが重要です。今まで高齢者の方々と関わる機会が何度もありました。例えば、小学二年生の「町探検」です。これは様々なお店や施設を歩いて町を体感しようというもので、デイサービスにお邪魔させていただきました。そこの方々と一緒に七夕飾りを作ったことを、五年程経った今でも鮮明に覚えています。手先がとても器用なおばあさんは、折り紙でお花を作ってくれました。また、おじいさんが飾り付け

を手伝ってくれたこともありました。デイサービスの方々と撮った写真が自宅にあり、皆さんに囲まれながら五年前の私は笑顔を浮かべ、過去の自分に思わず微笑んでしまいました。

中学生で高齢者の福祉について実感できたのは、校外学習です。東武日光駅周辺での自由散策があり、家族へのお土産を購入しようとして、揚げ湯葉まんじゅう屋さんを訪れました。その時の一瞬がとても頭に残っています。先に会計を済ませて揚げ湯葉まんじゅうを受け取った時、お店のおばあさんが私にこう言ったのです。

「買ってくれて、ありがとうね。」

と、おばあさんは優しくささやくような声で、私は胸を打たれました。私よりも断然長い人生を経験している方ならではの声かけだと感じました。どことなく、そのおばあさんにしか出せない雰囲気というか、それが余計に私の心に染みたのです。

この出来事を通して、高齢者の福祉とは何かを改めて考え直しました。振り返ってみて、私は高齢者の方々に優しさを与えていただいているだけであり、自分から恩返ししたことは思い浮かんできませんでした。私は高齢者の方々に一度でも寄り添ったことがあった

でしょうか。今まで祖父母に数え切れない程可愛いが
つてきてもらいましたが、私はそれに見合う恩返し
できていません。こうして作文を書いていると、様
々な反省点が思い浮かんできます。毎朝私の登校を外
立って見守ってくださいさるおばあさんにも勇気が出
ず、友達には至って簡単なはずの言葉が伝えられませ
んでした。

私たちは一人ひとりが社会の一員として尊重され、
支え合うことが大切です。これからは近所のおばあ
ちゃんに、

「おはようございます。いつも見守ってください、
ありがとうございます。」

と、勇気を出して積極的に挨拶していくことを誓いま
す。



車いすとエレベーター

田沼東中学校 一年 内田 彩葵

私は「福祉」というと、すぐに車いすが思い浮かびます。小学校の時に、福祉の学習の一環として車いすの体験をした印象が強いからです。車いすは、手でタイヤを回して動かすため腕や指の力が必要で、実際に乗ってみると、思った以上に疲れることが分かりました。また、段差があるとうまく進めず、誰かの力を借りなければならぬときがあることもそのときに実感しました。

車いすに関して気になることを改めて考えてみると、エレベーターが思いつきました。普段何気なく利用しているエレベーター。車いす対応のエレベーターにはどんな特徴があるか、調べてみました。

一つ目は、ボタンの位置です。車いす専用のボタンは、通常のボタンよりも低い位置に設置されています。それによって、車いす利用者にも手が届き、押しやすくなっています。

二つ目は、エレベーター内の設備です。エレベーターの中には、壁に車いす専用の手すりがあります。ま

た、正面には鏡が設置されていて、車いす利用者が後方確認できるようになっています。

三つ目は、ドアが開いている時間です。平均四秒しか開いていないドアも、車いす用のボタンを使うと、約十秒開いていて、ドアの閉まるスピードもゆっくりです。また、車いすでも乗り降りしやすいように、エレベーターの段差を自動で調整する機能を備えたものもあるそうです。

調べてみると、車いすの方が利用しやすいように、たくさん工夫がされていることが分かりました。そしてさらに、車いすでの利用しやすさを考えたこれらの工夫が、他の立場の人の使いやすさにもつながっている点に気付きました。

例えば、エレベーターのボタンの位置が低いことで、幼稚園や小学生の頃、小さな私もボタンを押すことができました。ドアの開いている時間が長いことで、混雑しているときや荷物が多くて速く動けないときなどにも、安全に乗降することができます。車いす利用者のための工夫は、みんなが助かる考え方の基となっていて、驚きました。人々の様々な違いに関わらず、最初から誰にとっても利用しやすい「もの」や仕組みなどを提供しようとするユニバーサルデザインの考え

方はこうした視点から、もっともっと広げていけるのではないかとも思いました。

誰もが幸せに暮らせる社会をつくるためには「もの」の面での工夫が大切ですが、もちろん心の結びつきは欠かせません。どんなに合理的で使いやすいものがそろっていても、一人では越えられない段差は確かにあります。思いやりや助け合いの気持ちも、ユニバーサルデザインの一つのピースとして大切にしていきたいです。そして、様々な角度から、福祉の充実を目指していきたいと思いました。

福祉について考えたこと

葛生義務教育学校

七年

恩田^{おんだ}

あおい

今までの私は、福祉についてあまり関心がなく、どのようなものか詳しく知りませんでした。そこで、福祉とはどのようなものなのか調べてみることにしました。福祉とは、「誰もが幸せに暮らせる社会になるよう協力し合うこと、また、生活に課題を抱える方たちが充実した暮らしをするための取組」と書いてありました。しかし、本当に、今の社会は誰もが幸せに充

実して暮らすことができる社会と言えるのでしょうか。実際に、私の身近なところでは、どのような取組がされているのか、また、どのようなところが不便なのか、振り返ってみました。

まず、私にとって一番身近な場所である学校について考えてみました。私の学校は昨年度、義務教育学校として開校したばかりです。校舎は新しくきれいで、便利なのがたくさんあります。閉校した小学校の校舎は、古かったので、いろいろな場所に段差があったりトイレも和式が多く使いにくかったりと、欠点が多い浮かびます。しかし今の校舎は、バリアフリーを意識して、ほとんど段差がありません。また、エレベーターや多目的トイレも各階に設置されています。「便利だな」と単純に思っていました。が、車椅子や松葉杖を使用している人には、活動しやすい構造になっているのです。

バスケットボールの練習で使うアリーナはどうでしょうか。外には点字ブロックがあったり、トイレは大きなバリアフリー仕様になっていたりします。多くの人が利用する場所なので、いろいろと配慮されています。しかし、実際にスポーツを観戦するときにはどうでしょう。二階席からフロアの試合を見ることを考え

たときに、車椅子の人が見るスペースがあまりないように感じました。

交通機関で使う駅はどうでしょう。券売所には点字が使われていたり、電車には優先席が設けられたりと、充実している面もあります。しかし、エスカレーターやエレベーターは一部の駅だけで、小さい駅には階段しかありません。車椅子の方が、一人で駅を利用し電車に乗りたいたいと思っても、誰かの手を借りなければなりません。すると、周囲の人に遠慮して外出することが減ってしまうかもしれません。「幸せに暮らせる」とは言えません。

調べてみると、「バリアフリー」という言葉はよく耳にしますが、私たちの身の周り全てがそうなっていないとは限らないことが分かりました。もちろん、誰もが充実して暮らせるように、町をよりよくしていく新しい取組や工夫は、これからますますされていくでしょう。しかし、その中で足りない部分は、お互いに助け合っていく必要があります。私は、困っている人や場面を見たら、自分にできることをすすんでしていきたいと思いました。そして、「心のバリアフリー」も実現できたらもつと充実した暮らしになると思います。

夏祭りを通して

赤見中学校 三年 吉田 美緒よしだ みお

今年の夏休み、私は母の職場で行われた夏祭りの手伝いをしました。母はデイサービスで働いていて、その施設では毎年利用者さんのために夏祭りが開かれています。私は母に頼まれて二回目のお祭りに参加することになりました。

デイサービスは福祉サービスの一つで、福祉サービスでは、全ての人が幸せに暮らせる社会を目指し、支援やサービスを提供します。高齢者や障害者、子供たち、貧困に苦しむ人々など様々な人々が安心して生活できるようにするための制度や活動が含まれるそうです。母の仕事もその一環で、母は日々、利用者のサポートをしているそうです。

夏祭りの当日は、朝早くから準備をしました。私が担当したのは輪投げコーナーでした。私は利用者さんが上手に投げられるようにサポートをしたり、利用者さんにお菓子を配ったりしました。夏祭りが始まり、利用者さんが笑顔で輪投げに興じる姿を見て私は嬉しくなりました。その中でも、特に印象に残ったのが、

一人の元気な高齢の女性でした。その方は普段から明るくて元気に過ごしている方だと聞いていたのですが、輪投げを成功させると、まるで子供のように嬉しそうに喜び、満面の笑顔を見せてくれました。その笑顔は私の心に残るとともに福祉の仕事の大切さ、すばらしさを感じられた瞬間でした。

一方、母はおみこしのかげ声の練習をしていました。皆が笑顔でおみこしを見ている姿を見ると、デイサービスの利用者の皆さんが本当に楽しんでいることが伝わってきました。母も一緒に声を出したり、手拍子をしたり、利用者の皆さんと笑顔で交流していました。母のその姿を見て、福祉の仕事はサービスをただ提供しているのではなく、心の交流こそが大切であると実感しました。お祭りが終わった後も利用者の方々の笑顔が続く、私にとって忘れられないものとなりました。母の仕事のやりがいや喜びを少し理解できたような気がします。そして母を尊敬する気持ちが一層強くなりました。

この夏祭りを通して、私は多くのことを学ぶことができました。福祉の仕事は決して楽ではありませんが、人々の笑顔や感謝の言葉が何よりのモチベーションとなるのです。将来、私も母のように誰かのために役に

立つ仕事をしたいと強く思いました。今回、母の仕事の手伝いをしたことで多くのことを学べたことに感謝するとともに、これからも福祉について興味をもって積極的に関わりをもつように努めていきたいです。多くの人の笑顔が見られるように。

祖父と福祉

葛生義務教育学校 九年 矢島^{やじま} つむぎ

「抗がん剤点滴治療を始めていきましよう。どうい
う症状が出るか分からないので、最初は長時間の運
転はしないほうがいいでしょう。ご家庭の協力が必要に
なります。」

祖父の病気が見つかり、これからの治療について医
師から話がありました。私は、家に帰ってきたときの
祖父の元気のない表情が忘れられません。祖父
は家族に迷惑をかけてしまうことを申し訳なく思っ
ていたようです。家族は皆で祖父の治療を支えていこう
と考えていたので、これからどうしていくかを相談し
ました。一番困ったのは病院への送迎でした。誰も送
迎できないときに治療をどうするか、そのときにどう

支えていくか、何かよい方法はないか、皆で考え合いました。その結果、病院の相談窓口に行こうということになりました。相談した結果、高齢者福祉タクシー運転補助という制度があることが分かりました。これは、高齢者の日常生活で必要とされる通院または通所にかかるタクシー料金の一部を助成してくれるというものです。

この助成は市町村ごとに対応が違いますが、佐野市にもあることが分かりました。もしも家族が病院へ送迎できないときは通院を諦めようと考えていた祖父は、このような福祉サービスがあることを教えてもらい、とても安心していました。

そして、ソーシャルワーカーの方にも相談したことで、困っているときに支えてもらえる手立てを知ることができました。他にも祖父が利用できる福祉サービスがあることを教えてくれました。私も家族も知らないサービスがありました。

私たち家族は、祖父への支援方法を考えることを通して、福祉について学ぶことができました。私は今まで福祉を身近に感じることはあっても、すすんで学んだり知ろうとしたりするところまではいきませんでした。そして、福祉というとボランティアや介護という

イメージが強くなりました。しかし、福祉とは特定の誰かのためではなく、全ての人が人間らしい生活を送れるように支えるための公的な制度であると再認識できました。

社会の中で生きづらさや困りごとを抱えている人はたくさんいると思います。子供や持病をもっている人、ひとり親、心身に障がいがある方などです。ソーシャルワーカーの方と出会えたことで、あらゆる人が自分らしく自立した暮らしを送れるように、支援のための制度がいろいろと作られていることを学びました。

今、支援を必要としていない人も、将来的には福祉的支援を受ける可能性があるかもしれません。福祉をもっと自分事として考えられるような機会が、学校でも地域でも増えることを願います。



福祉作文 佳作（小学生の部）

また、あいにくね	城北小一年	仲江川結翔
まほうのことば	出流原小一年	尾池由彩
まちでみつけたもの	栃本小一年	廣瀬ひかり
おさじさん	佐野小二年	仲野敬太
あんしんしてくらせるかんきょうづくり	犬伏東小二年	柴田琴
点字ってなんだろう	旗川小二年	島田彩羽
まほうのお手つだい	旗川小三年	齋藤葵
妹について	犬伏東小四年	兵藤凱咲
盲導犬ふれあい教室で学んだこと	吾妻小四年	大関あかり
手足が自由に動くこと	赤見小四年	山根なる
心のやさしさ	田沼小四年	和田琳風
もうどう犬について	多田小四年	町田暁人
「笑顔の社会になるために」	天明小五年	山田杏奈
身近な福祉	多田小五年	黒田東樹
ぼくにできること	植野小六年	落合墨也
ユニバーサルデザインの大切さ	旗川小六年	萩原杏莉
一人暮らしの高齢者の安全を守るには	吾妻小六年	間明田志歩
大好きなおじいちゃんおばあちゃん	石塚小六年	塩島昂希

福祉作文 佳作（中学生の部）

視覚障害がある人のための設備	北中一年	荒川蘭
ヘアドネーション	佐高附中一年	小暮凜
明るい社会をつくるには	田沼東中二年	亀山優桜
相手を思う食事とは	葛生義八年	廣瀬友香
福祉って難しいことじゃない	南中三年	金井愛夏
家族について	北中三年	金子未空
生活を支えるという事とは	田沼東中三年	鶴巻音葉
生きやすい社会のために	あそ野義九年	黒田結愛
「人の優しさ」	佐高附中三年	櫻井響



令和6年度 児童・生徒福祉作文作品集

「青 空」

発行日 令和7年2月1日

発行者 社会福祉法人 佐野市社会福祉協議会

この作品集は、赤い羽根共同募金の寄付によって作られています。